

我が国では、EVの急速充電規格としてチヤデモ方式が普及しており、充電している時は、容量（キロワット時）や残量（%）など蓄電池の状態を、車種を問わず把握することができる。このため、これまでのEVを用いた需給調整に関する実行しているEVに対しても蓄電池状態に関する実験結果によると、走行距離は、2022年1月までの期間で2万台にもなり、国産EVも合わせると4万台に達する。さらに「軽EV」も普及傾向にある。しかし、現状では蓄電池状態を表すデータ形式が車種によって異なるなど、このようないくつかの規格が存在しない。

【当所の取り組み】

我が国におけるEVの累計登録車販売台数は、2022年1月10月までの期間で2万台にもなる。

用車の開発に着手する。電気自動車（EV）政策を述べた。今回は、EVが接続された「後」の研究が主体であつた。一方、走行している時でもEVの蓄電池状態を遠隔把握できれば、充電設備までの距離や蓄電池残量などを取り組みを述べる。

【走行しているEV】

EVが接続された「後」の研究が主体であつた。一方、走行している時でもEVの蓄電池状態を遠隔把握できれば、充電設備までの距離や蓄電池残量などを取り組みを述べる。

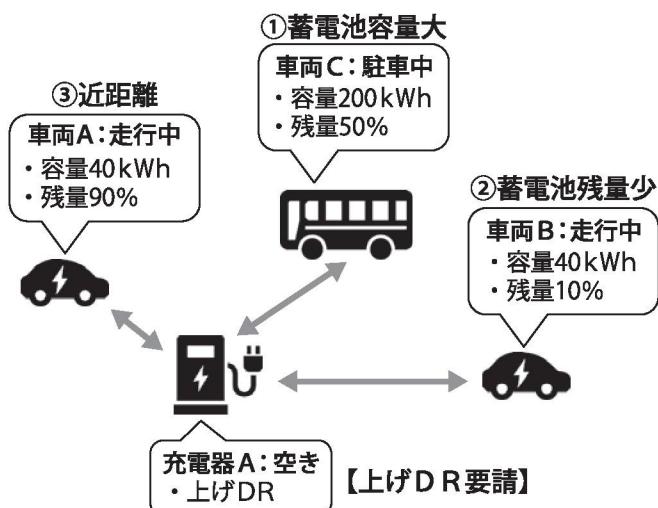
EVが接続された「後」の研究が主体であつた。一方、走行している時でもEVの蓄電池状態を遠隔把握は、走行中のみならず普通充電や他方式の急速充電規格の策定、例えばチャージ方式と故障診断などコネクタとの連携などが挙げられる。蓄電池状態の遠隔把握は、走行中のみならず普通充電や他方式の急速充電

走行中も残量遠隔把握
再エネ有効活用の道に

前回は、カリボン二
ユートラルに向けた再
生可能エネの導入とそ
の変動をカバーするた
めの定置用蓄電池の活

ゼミナール

再生可能エネルギー



國上に日本における「ハゲ」

自動車メーカー1社が当所では、当面のEVの代表として、このメカニカルの車種に用いる遠隔把握システムを開発し、走行中の蓄電池状態に関するデータを継続的に収集している。現在は、需給調整に向けたEVの活用検討のため、遠隔把握システムの運用条件に対する費用の違いや、長期運用で生じるデータ欠落などを分析評価している。また、需給調整への活用では、商用車は自家用車と比べ、

【上げDRのケース】
遠隔把握システムの活用例として、太陽光発電による余剰電力が発生し、まだEVが接続されていない充電器Aに対して上げDRを要請するケースを示す。図。充電器と複数台のEVがバラバラの状態から上げDRを効率よく行うには、(1)蓄電池の容量が大きく(2)残量が少なく(3)充電器にできるだけ近い――Eの構築】に参画し、主に商用車の電化を対象としたエネルギー・マネジメントに関する研究を進めている。

の構築」に参画し、主に商用車の電化を対象としたエネルギー・マネジメントに関する研究を進めている。

A black and white portrait of a middle-aged man with a shaved head and glasses, looking directly at the camera.

名雪
琢弥

電力中央研究所クリツチノベーシヨン研究本部 EN-IC研究部門 上席研究員

ノイノベーション基金
事業の一環である「ス
マートモビリティ社会
(隔週で掲載します)
用例を踏まえた事業性
評価を進めていく。

なゆき・たくや 19
94年度入所、専門はパ
ワーエレクトロニクス。